

複式簿記の本質に 鋭く切り込んだ理論書

■評者 大阪経済大学 渡邊 泉

1 本書の構成とねらい

「変わる社会、変わる会計」(2006年、日本評論社)、

「変貌する現代会計」(2008年、日本評論社)と激動する現代社会の現象を会計というフィルターを通して抉り出してきた著者がその鋭い矛先を複式簿記の本質に向けて切り込んだ。今日行き過ぎた意思決定有用性アプローチのもと、ややもすると会計の原点である複式簿記の記録の重要性が看過されがちな今日の現象に警鐘を鳴らしているのが本書である。800年もの永き

にわたって果たしてきた複式簿記の取引事実にもとづく記録の重要性を理論と歴史の両面から徹底的に分析し、再確認しようとして著された。まさに、満を持しての上梓である。

本書の構成は、以下のとおりである。紙面の関係で全体の章構成は省略し、スケルトンのみを示す。

- I 単式・複式・3式簿記
- II キャッシュフロー計算の複式簿記
- III 利益計算とキャッシュフロー計算-同型性と相対性-
- IV 複式簿記のサイエンス-構造と形態-
- V 歴史のなかの複式簿記

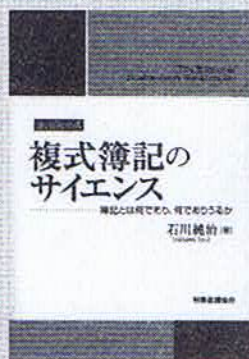
Column (コラム) 10項目

あとがき

『複式簿記のサイエンス -簿記とは何であり、何でありうるか-』

石川純治(著)

税込 1,995円
税務経理協会 刊



本書のねらいは、記帳方法の説明や簿記の原理や理論の単なる解説ではなく、現に目の前に存在する現象形態だけではなくその背後に隠れている事象の同型性と相対性を分析し、理論、歴史の両面から複式簿記の本質を解明しようとしているところにある。従来までの簿記書には類書を見ない本格的な理論書である。限られた紙面であるが、評者なりに感じたところを述べることにしたい。

2 読了後に評者が感じたこと

本書は、単式簿記から始まり、次いで複式簿記、キャッシュ・フロー計算書へと展開している。複式簿記の本質を捉えるためには、論理的相対化の視点が必要であり、そのため複式簿記に先立って単式簿記からの説明が必要と述べている。

伝統的手法による歴史分析の側面から接近するならば、簿記史ないしは会計史の出発点は、「複式簿記」の生成史であって、決して「簿記」の生成史ではない。そのため、複式簿記は、13世紀の初めにイタリア北方の諸都市で企業簿記として商取引を記録する技法として産声をあげたことになる。その原点は、複記による帳簿への記録行為であり、その記録の対象となるのが経済事象、すなわち取引である。この記録行為は、あくまでも商行為であり、単なる財産保全のための管理行為ではない。

したがって、取引は、基本的には、等価交換で行われる。等価交換である以上、一方だけで成立するのではなく、必ずもう一方が存在する。この二面性にこそ、企業簿記が単式簿記ではなく複式簿記として歴史の舞台に最初に登場する現実的根拠がある。時間軸から見ると、簿記は、複式簿記として成立し、後年、その略式法ないしは簡便法として、単式簿記が出現する。決して、単式簿記から複式簿記へと進化して行ったわけではない。福沢諭吉が『帳合之法』において、複式簿記を本式、単式簿記を略式と呼んだのは、まさしく卓見であった。

しかし、簿記を企業簿記に限定せず、経済的行為の記録技法と見なすならば、単なる現金の収支記録もまた簿記（単式簿記）となり、歴史的に複式簿記に先行することになる。だとすれば、両者の歴史的継承性をどのように説明するのが問題になる。いうまでもなく、著者が単式簿記の説明から章立てしているのは、説明上の問題であり、必ずしも、歴史的に単式簿記から複式簿記へと発展したと説いているわけではない。

著者が最も力を入れているところは、第6章と第7章である。従来までの研究では、損益計算書とキャッシュ・フロー計算書は、その目的を異にしていたため、両者の構造的な相互関係が必ずしも明らかではなかった

(103頁)。そのため、第6章では、損益計算における財産法と損益法、キャッシュ・フロー計算における間接法と直接法の構造的関係に対応させ、財産法と間接法、損益法と直接法の同型性を明らかにしている(108頁、図表6.2参照)。それを受けて、第7章では、単に一面的な現金の収支記録と思われがちなキャッシュ・フロー計算を、現象面では見えてこない“隠された”構造(134頁)を浮き彫りにすることによって二面的に捉え、複式簿記の持つ構造原理を明らかにしようとしている。すなわち、キャッシュ・フロー計算書で複式仕訳が考えられるか否かを、実務とは離れ、純粹理論としてキャッシュ・フロー計算書の深奥に鋭くメスを入れている(128頁、図表7.4参照)。いわば、キャッシュ・フローの陰に隠れている変動原因を変動貸借対照表から明らかにし、キャッシュ・フロー計算書における複式仕訳の構造を明らかにしようとしているものと思われる。まさに著者の面目躍如である。

最後に、少し長くなるが、著者の言葉を引用して、私の書評の締めくくりにしたい。

「今日の企業会計は(投資家向けの)情報開示志向をいっそう強めています。……それを「記録なくして情報あり」(情報>記録)の会計といえば、その一つの特徴が理解されると思います。しかも情報開示志向であるがゆえに、期中よりも決算時点が重要になり(決算>期中)、「情報開示が利益を生むか」という素朴な疑問さえ生じてきます。さらにいえば、その行き着く先には、「複式簿記不要不在」の会計というあり方さえも見えてきます。しかし、簿記会計の原点は「情報」よりも「記録」にあるといえます。それは簿記会計の歴史の中で学習すれば自ずと理解されるはずです」(217頁)。

複式簿記の本質に鋭く切り込んだ、近年まれにみる本格的な複式簿記の理論書である。是非とも一読を進めたい良書である。

複式簿記のサイエンス

—簿記とは何であり、何でありうるか

石川純治 著

(A 5 判・276頁・定価1,995円(税込), 税務経理協会刊)

評者=松本敏史■同志社大学教授



「頭がスッキリする簿記の本」というのが読後感である。長年簿記の勉強をしているのに何かモヤモヤとしている人、勘定(Tフォーム)こそ複式簿記と思いこんでいる人、ひたすら解法のテクニックに磨きをかけている受験生が本書を一読すれば、複式簿記のメカニズムが根底から分かるだけでなく、新たな簿記の世界が一気に広がることになる。

本書のキーワードは「相対化」である。現行の複式簿記を絶対視するのではなく、それが様々な簿記形態の1つに過ぎないことを理論的かつ歴史的に示しながら、そこに通底している複式簿記の基本構造を抽出している。そしてその視点から改めて現行の複式簿記を眺めることで、これまで見えなかった姿(スケルトン)を確認し、その変化の方向(ありうる姿)すら見えてくるように工夫が施されている。

本書の章立てとポイントは次のとおりである。

筆者は、实在勘定(資産、負債、資本勘定)だけで損益を計算する簿記を単式簿記、一方、实在勘定と名目勘定(収益、費用勘定)によって損益を二重に計算する簿記を複式簿記と定義している(第1章)。つまり筆者にとって「複式」が意味するものはこの「利益の二重計算構造」であり、「加算的減算方式」による貸借「複記」ではない。それは記録計算形態の1つにすぎず、「直接的減算方式」や「展開表(スプレッドシート)」でも複式簿記は成立する(第2章)。そして筆者は取引の記録計算形態だけでなく、複式簿記の基本メカニズムである「複式」さえ相対化されることを示すために井尻雄士教授の三式簿記を紹介している(第3章)。

次に、損益計算書(P/L)、貸借対照表(B/S)、キャッシュフロー計算書(C/F)の構造的関係である。期間損益計算の方法には資本増減の原因分析に基づく損益法と、实在勘定の変動に基づく財産法がある。同様にC/Fの作成方法にも現金収支記録に

基づく「直接法」と貸借対照表の変動に基づく「間接法」があるが、元帳に現金の増減原因を説明する「収支勘定」を設定すれば直接法は損益法と同型になり、間接法は財産法と同型になる。そして決算で損益勘定残高を資本勘定に、収支勘定残高を現金勘定に振り替えるとき、そこにB/S、P/L、C/Fの3つの財務諸表を統合した記録計算システムが成立する(第4-9章)。他にも応用可能なこの在高比較計算と原因別比較計算の二面的計算システムこそ「複式」の核心部分にほかならない(第10章)。

続いて筆者は記帳技術の進歩(粘土板⇒木片⇒紙⇒磁気)や計算目的の変化による複式簿記の形態変化の過程を示すことで「技術性」と「歴史性」の観点から現行の複式簿記を相対化したあと(第11-13章)、さらに勘定学説(勘定間の組織的関連の説明理論)の変遷をたどることで背後にある会計理論もまた相対化されることを示している(第14章)。

そして最終章では5つの勘定学説の違いを展開表による仕訳で表現したあと、その違いが加算的減算方式によって消滅し、その結果、いずれの勘定学説においても同型の仕訳が行われることを証明している。勘定学説に興味がある者にとって、ここでの説明は圧巻である(第15章)。

本書は複式簿記の構造分析を主要なテーマにしているが、そこには1つの問題意識がある。「記録なくして情報ありき」という表現が端的に示しているように、「現代の会計」では投資情報の有用性が重視され、記録計算システムの構造に関する議論が背後に追いやられている。筆者は簿記の存在意義自体が相対化されつつあるときに、あえて複式簿記の観点から現代の会計の有り様を問い直している。この一見矛盾する試みは、簿記会計の原点を「記録」に求める筆者の基本的立場の表明であり、また現代の会計の特異性を浮上させるための手法でもある。

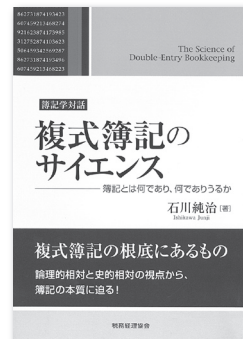


石川 純治著

『複式簿記のサイエンス —簿記とは何であり、何でありうるか』

(税務経理協会刊／本体1,900円＋税)

東京経済大学名誉教授 田中 章義



著者は、変貌する現代会計の諸相を分析する会計時評に活躍する人であり、他方では、会計とは何か・複式簿記とは何かを考究して、会計本質論や会計方法論に沈潜する人でもある。全5部15章からなる本書は、独自の方法論を駆使して、簿記とは何か・会計学とは何かを改めて考えさせる、小さな大著である。

本書の方法論的特徴

本書には「構造主義」(structuralism)の方法論が底流している。だがそれだけでない。著者は、戦前から戦後を通じて日本の会計学につよい影響をあたえた木村和二郎相伝の「弁証法」(dialectics)をも継承している。この方法論的の二刀流が、本書にふかい奥行をもたらしている。

本書は、弁証法からくる相対化と構造主義からくる構造の同型性という二つのキー概念を用いる。「相対化」とは、あるものを孤立的にみるのではなく、他のものと論理的・歴史的に関係づけることによって、重層的・客観的にとらえる方法である。

複式簿記を相対化する

I部「単式・複式・3式簿記」では、第1の「相対化」の方法を使って、三つの簿記の形態的關係を分析する。まず現実の複式簿記

から単式簿記の要素である実在勘定(貸借対照表勘定)を抜きだし、その単式簿記で記帳例を解いてみる。すると、純利益の計算はできるがその原因計算ができない。そこで原因をしめす名目勘定(損益計算書勘定)をつけ加えてみる。するとそれは単式簿記を包摂している簿記、すなわち複式簿記なのである。

つまり、単式簿記・複式簿記というのは絶対的な区別ではなく、それぞれが簿記の相対的に特殊な形態なのである。単式簿記は複式簿記のモメント(要素)でもある。複式簿記が別のモメントを包摂すると三式簿記という新しい形態が生まれる。絶対的とみえる複式簿記をこのように、ある実体(簿記=経営単位の経済計算)の一形態であると論理的に相対化して捉えるのは、弁証法的方法であろう。

複式簿記の構造的同型性

II部とIII部では、まず複式簿記の記号的な一般構造を行列簿記形式で明らかにする。貸借対照表B/S、損益計算書P/L、キャッシュフロー計算書C/Fの「同型性」を解明するためである。貸借対照表等式($C + NC = L + K + \Pi$)とその期末・期首の差額等式($\Delta C + \Delta NC = \Delta L + \Delta K + \Delta \Pi$)を変形し^①、間接法損益計算式($\Delta \Pi = \Delta C + \Delta NC - \Delta L - \Delta K$)と間接法キャッシュフ

① C =キャッシュ資産、 NC =非キャッシュ資産、 L =負債、 K =資本、 Π =累積利益。 Δ は期末と期首の差額、したがって $\Delta \Pi$ は期間利益。

ロー計算式($\Delta C = \Delta \Pi + \Delta L - \Delta NC + \Delta K$)を導き、P/LとC/Fの「構造的同型性」が示される。

このように、異質なものと見られていたP/LとC/Fの間に、共通する構造とその同型性を見いだしたことは、学界への大きな貢献というべきであろう(9章-10章)。

「構造」とは、形態のさまざまな側面を切り捨てて得られる、目にみえない抽象的関係(記号化された関係)のことで、いかなる変形・変換によっても変わらぬものとされる。たとえば、2次元の三角形では x と y の関係が不変ならどんなに変形しても構造的には同型である。「同型性」とは、構造と構造の間にある抽象的レベルでの同一性を意味している。

言語学や人類学が、構造主義によって画期的な業績を残したことはよく知られている。複式簿記の記号的構造と同型性を明かにしたのは石川教授の功績であると思う。だが、構造に止まらずに形態へと考察を進めるのが本書の特長である。

構造と形態の展開

簿記の特定の形態とその規定要因を考察するIV部「構造から形態へ」にも、「相対化」の方法が役立つ。というのは、構造主義が共時態(静態)を前提して変化を考慮しないのにたいし、弁証法は万物の歴史的・形態的变化を前提して、その諸相を探求するからである。

(V部「歴史のなかの複式簿記」13-15章〈歴史的相対化〉は紙数の都合上省略する。)

簿記の形態的变化(11-12章)には、1)構造不変→形態变化、2)構造変化→形態变化、の二つのケースが想定されている。(193ページ)

1)は水の例をあげて、 H_2O (構造)→温度

変化(形態化の条件)→a)液体 b)固体 c)気体(形態の変化)というように、①変わらぬもの(構造)に②変えるもの(条件)が作用して、③変わるもの(形態)が定まると説明される。実例としては、複式簿記の記号的な一般構造にたいする勘定系統、仕訳帳、元帳、試算帳等の諸形態などがあげられている。

変化する構造としての主体

2)「構造変化→形態变化」のケースでは、構造自体が入れ替わる場合は別として、本来なら変わらぬものである「構造」が変化する要因をどこに見いだすのかという難問がある。

結論的にいえば、私には馬場克三が提唱した「論理的主体」という概念が浮かんでくる。主体性とは、諸個人に内在する・おのれ固有の活動を希求する本性であるが、人間以外(とくに有機体)にも同様の本性があることはヘーゲルらの哲学者が指摘していた。馬場教授は、会計主体論の研究を通じて、真の会計主体は、そのような論理的(人以外の意)主体としての個別資本だと考えたのであった^②。

主体とは、自己同一性(普遍性)を保ちながらみずから変化・発展し、種々の個別的形態として現れるものである。生物における生命、社会における労働、企業会計における個別資本などが、その例としてあげられよう。

ではその主体が変化する要因はどこにあるのか。岩田 巖が「いつも念頭に浮かぶ」といった、「いかなる事物(主体)も、矛盾にみちた、相互に排斥しあう、対立せる諸傾向を、それ自身のうちに含めるもの(後略)」^③という語句が、いまも示唆に富むようにおもわれるのである。

② 馬場克三『会計理論の基本問題』第2章 企業会計における主体の問題、森山書店 1975。

③ 岩田 巖『利潤計算原理』同文館 1956、324ページ。傍点と括弧内は田中。